

アメリカ比較文学学会 (ACLA) ・2016 年度年次大会の参加記録

2016 年 3 月 17 日～23 日

於 ハーバード大学

マヌエル・アスアヘアラモ (博士課程)

今年のアメリカ比較学会の全国大会が 3 月 17 日から 23 日までボストンに拠点を置いているハーバード大学にて開催された。この大会の参加申し込みの手順がやや特別で、研究者が個人として研究発表の要項などを提出して参加応募をするのではなく、まずは第一段階で参加希望の研究者がテーマ別で研究領域をより細かく絞ったゼミのパネル担当 (Seminar Organizer) を申し込む仕組みになっている。かなり数のあるこのパネルが一次検査を通過してから、次は個々のパネル担当が論文募集 (Call for Papers) を ACLA のホームページや研究者の出身校学科の電子掲示板、ソーシャルメディアなどに載せて個人として研究発表をする研究者を集めるプロセスなので、普通より少し込み入った申請になっている。ただ、個々のパネルには一人か二人の担当がいるため、一旦発表原稿が希望パネルの申請審査を通れば、学会大会当日よりかなり前にメールリストなどを通じてパネルのその他の発表者の原稿や研究アプローチについて容易に知ることができる。そのため、3 日間にわたって何百人もの参加者に上る、アメリカの大きさに相応しい巨大な大会で迷子にならずに済むようなコンパクトな研究グループが自然に成立するようになっている。もちろん、この 3 日間、自分のパネルの集まる時間以外で、その他のパネルを聴講したりその質疑応答に参加したりすることも大歓迎される。

私の場合、第一段階に自分でパネルを担当する申請をしなかった。しかしパネル枠のタイトルが既に決まっていた第二段階にニューヨーク州立大学の知人がパネル担当になっていたのを見て申し込んだのだ。

そのパネルのタイトルは *Orientalism and Iberia's Search for Modernity* (オリエンタリズムと現代を追求するイベリア半島) というものだった。私はそれに合わせてハーバード大学に提出する博士論文の一部に基づいた、*The Easternmost Sally: Don Quixote in early East Asian Translations* (極東への冒険：東アジアにおける『ドン・キホーテ』の初めての翻訳について) という研究発表をすることにした。中国、韓国、それに日本で 19 世紀末と 20 世紀初頭に発表された『ドン・キホーテ』の翻訳の出版背景や、訳文の口調、フランス語や英語からの重訳の現象などについて、スペイン語圏と東アジア研究という二つの分野を跨ぐような内容だったため、パネルに申請した際に他のパネリストには関心を持っていただけるかどうか少々心配していたのだが、登録したあと他のパネリストの発表テーマを見たときに安心した。それらの研究対象には例えば、スエズ運河とスペイン人のアジア旅行記や、アジアに対するオリエンタリズムとスペインの映画、16 世紀のイエス会士が書いた日本紀行文といったテーマなどがあり、スペイン語圏とアジアの文化的交流

を比較文化的なアプローチで研究する発表ばかりだった。

私が参加したパネルの担当者と数人のパネリストとは実は2014年にニューヨーク大学で開催されたアメリカ比較文学学会全国大会で既に会っていた。そのため、今回はお互いに研究の進行状況を確認したり、アメリカでのスペイン語圏文学研究の状況などについて意見を交わすなど、同じ分野の研究者と絆を強めるための、教職のプロフェッショナル化の一段階という側面からでも意義のある学会参加だと思われた。

私は2015年6月から語学留学のため中国北京に滞在していたので、2016年のこの学会に参加するためのアメリカ訪問は、ほぼ1年ぶりのアメリカ、そしてハーバード大学だということもあって、懐かしいキャンパスの雰囲気と、資料に豊富な図書館を思う存分に満喫するために10日間の滞在することにした。ニューヨーク大学で開催された、前回の学会とは違って、今回は母校で開催されたのでキャンパスの勝手がわかって、前回よりはより多くのパネルや特別講義を聴講できた。

ハーバード大学の比較文学学科に在籍している三年生以上の院生の多くは大会に参加していたので、学科の友人の発表を見に行ったり来たりするだけで1日が終わったという、研究的好奇心三昧の素敵な3日間になった。その上、今年の大会には現代文芸論出身の秋草さん、それに博士課程在籍中の邵丹さんも大会に参加しており、私が彼らに久しぶりに会えたことで懐かしいハーバード大学だけではなく、それよりもっと懐かしい本郷キャンパスの銀杏並木がある東京大学の世界に少しでもまた触れたという喜びも得られた。

ここに来ては、毎回のACLAの目玉の一つだと呼ぶべき基調講演の話もしなければならぬと思う。本年度の基調講演はカリフォルニア大学ロサンゼルス校で教鞭を執っているUrsula Heise (ウルスラ・ハイス) 先生によるものだった。彼女の研究分野はEcological Humanities (人文環境学)で、世の中の様々な生態に生きる動物たちと人間の関係を文学を通して考察する多数の著書を執筆している。私は以前にハーバードで私の指導教授を務めてくださっているKaren Thornber (カレン・ソンバー) 先生の著書*Ecoambiguity*で多少は人文環境学の研究アプローチについてすでに知っていたのだが、ソンバー先生が文学作品の登場人物が自然環境とどのような関係を持っているかに焦点を置いているのに対し、ハイス先生は作中の動物と語られる架空世界の関係に焦点を当てている内容だった。少し脱線するが、私はその講義を聴講した際、多和田葉子のドイツ語で執筆された作品『雪の練習生』を連想せざるを得なかった。その小説のストーリーは、クヌートという、ドイツの動物園のスターだった北極熊の視点から語られている点で、ハイス先生が提案している人文環境学的なアプローチを利用すればより豊富な読みを得られるだろう。

学会にその他にも特別座談会もいくつかあって、その中の一つでは去年ハーバード大学東アジア研究家の名誉教授として退職したStephen Owen (スティーブン・オーウェン) 先生(中国文学、主に唐朝の漢詩専門)が記憶にまだ新しい講義をなさった。Don't Look Back (振り返るな)というタイトルの座談会で、50年間以上に亘る彼のキャリアを振り返えつつ、教育者としての彼が見いだせるデジタル化する教室での新しい可能性を、彼特有の情熱と博識で語った。特に興味深いのは文学の教室におけるバチャールリアリティーの導入による開ける教育の可能性の想像を膨らませる言葉だった。「VRを使えば、現在の世界の環境を架空世界で再現できるだけでなく、昔の世界をも蘇らせることができるんだ。例えば、唐朝の長安を丸再現して、その中に月見会で漢詩を詠んでいる李白の姿をバチャールの世界で再現するだけでなく、李白の周りの世界、

当時の文字の書き方、当時の中国語、当時の街の風習や外見などを丸再現することだってできる日が絶対来るんだと信じている。その暁には、未来の学生たちが過去の世界との触れ合いによって生まれてくるより深い、昔の文学作品に対する理解と一種の親しみが、我々研究者の理解と仕事ぶりに新しい刺激も与えてくれるだろう」とオーウェン先生が熱く語る姿が印象的だった。

来年の2017年度大会では、地球化する文学の時代に相応しい発展として、ACLAの全国大会がある意味で「全国」大会ではなくなることになっている。なぜなら、ヨーロッパで初めて学会大会を開催する大学としてオランダのユトレヒト大学（Utrecht University）が決まっているからである。今年のポップ・ディーランのノーベル賞受賞で見られた、加速する文学の定義の拡張と同時に進んでいく世界文学の魅力を具現化していると思われる。